

厚生労働科学研究費補助金難治性疾患等政策研究事業
難治性炎症性腸管障害に関する調査研究
分担研究報告書（平成 28 年度）

「クローン病肛門部病変のすべて」の改訂

研究協力者 二見喜太郎 福岡大学筑紫病院外科 教授
東 大二郎 福岡大学筑紫病院外科 講師
平野由紀子 福岡大学筑紫病院外科 助教

研究要旨：診断から治療まで一冊に網羅したクローン病肛門部病変の解説書として、2011 年 10 月に刊行した「クローン病肛門部病変のすべて」は、肉眼所見、画像所見を多く掲載し解説を加えて肛門部の診療になじみのない内科医にも活用できる内容となっている。刊行から 5 年以上経過して、診断的、治療的な研究の進歩により追加すべき新しい事項も増えており、また肛門部癌の増加は早期診断の必要性に迫られている。今回、これらの事項を加えて、さらに実臨床的なものになるよう改訂を計画した。

共同研究者

杉田 昭(横浜市立市民病院)、舟山 裕士(仙台赤十字病院 外科)、根津 理一郎(西宮市立中央病院)、福島 浩平(東北大学大学院 医工学研究科消化管再建医工学分野・医学系研究科分子病態外科分野)、渡辺 聡明(東京大学 腫瘍外科・血管外科)、池内 浩基(兵庫医科大学病院 IBD センター)、藤井 久男(吉田病院)、楠 正人(三重大学大学院 医学系研究科 消化管・小児外科)、板橋 道朗(東京女子医科大学 第 2 外科)、前田 清(大阪市立大学 腫瘍外科)、亀山 仁史(新潟大学歯科学総合病院 消化器外科)、高橋 賢一(東北労災病院 大腸肛門外科)、木村 英明(横浜市立大学附属 市民総合医療センター)、水島 恒和(大阪大学 消化器外科)

刊行し、肛門部の診療になじみのうすい内科医にも利用されていると考えているが、5 年を経過して、診断、治療ならびに癌サーベイランスなどの研究がすすみ、追加すべき事項が増えており、今回、内容の修正に新たな事項を加えて、診断から治療までを一冊に網羅したさらに実践的な参考書の作成を目指している。

B. 研究方法

現行の「クローン病肛門部病変のすべて」には、64 枚の肉眼所見を含めて診断・治療に関する事項を掲載しており、まず内容を吟味して修正を行う。さらに、診断的および治療的な最新の事項の追加および肛門部癌に対するサーベイランス法も加え外科系プロジェクト研究として作業を進める予定である。

A. 研究目的

クローン病において肛門部は罹患頻度の高い部位で、病変は難治性、易再発性で若年で発症するクローン病の長期経過を左右する重要な因子の一つであるばかりでなく、初期症状として早期診断を導く手掛かりになることもよく知られている。「クローン病肛門部病変のすべて」は 2011 年 10 月に外科系プロジェクト研究の成果として

C. 研究結果(改訂の内容)

診断的事項としては、現行掲載している写真(肉眼所見)は典型例が中心であり、さらに症状のない病変、診断の契機となった病変などを含めて変更を行う。Anal fistula に対する呼称を通常の痔瘻と区別するために肛門部瘻孔に変える。肛門部瘻孔の分類として AGA の分類、重症度分類とし

ては PDAI を追記し、麻酔下検索(EUA)の実際の解説を加える。

治療的事項としては、治療目標を明記して、とくに瘻孔・膿瘍に対する薬物治療の選択、外科治療としては瘻孔切除例(Lay open 法)の適応とリスク、Seton 法に関しては実際の手技と管理を呈示する。人工肛門についても適応、手術、残存した直腸肛門部、ストーマ部の管理を解説する。肛門部癌については、早期癌の症例を加えて、サーベイランスの実際を掲載する。

D. 考察

現行の「クローン病肛門部病変のすべて」に不足した事項ならびに新しい知見を加えることにより、診断的、治療的に実臨床で、とくに肛門部の診療に不慣れな内科医にも分かりやすいクローン病肛門部病変の解説書になると思われる。また、顕著に増加している肛門部癌はクローン病患者の生命予後を左右する重要な因子であり、サーベイランスの解説は早期診断へつなげるものと考ええる。

E. 結論

クローン病において、長期的な QOL の維持に肛門部病変の管理は不可欠であり、一冊の解説書があれば診療科を問わず、より適切な対応につながり、ひいてはクローン病患者の生産性の向上を導くものと考ええる。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む)

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

参考文献

- 1) 渡辺守、佐々木巖、二見喜太郎:クローン病肛門部病変のすべて - 診断から治療まで -、厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服事業「難治性炎症性腸管障害に関する調査研究」、平成 23 年度研究報告書別冊, 2011.10.
- 2) Irvine EJ. Usual therapy improves perianal Crohn's disease as measured by a new disease activity index. J Clin Gastroenterol 20: 27-32, 1995
- 3) Sandborn WJ, et al. AGA technical review on perianal Crohn's disease. Gastroenterology 125:1508-1530,2003
- 4) Taxonera C, et al. Emerging treatments for complex perianal fistula in Crohn's disease. World J Gastroenterol 15:4263-4272,2009
- 5) Marzo M, et al: Management of perianal fistulas in Crohn's disease: an up-to-date review. World J Gastroenterol. 21:1394-1403, 2015